2　海揚がりの須恵器２点

新潟市在住の井村しず江氏・井村洋人氏が所蔵されている須恵器２点について資料紹介を行う。

経　　緯　海揚がりの珠洲焼の新聞記事を見た井村しず江氏から「家にも海から揚がった縄文土器のようなものがある」との電話が新潟日報の記者にあり、同記者から文化財センター職員の同行を求められた。平成26年４月４日（金）に、記者と共に所有者宅を訪問し、須恵器２個体であることを確認した。発見の経緯は、しず江氏と長男井村洋人氏から伺った。

須恵器発見の経緯

資料１（須恵器大甕）　しず江氏の夫、故井村秋男氏が10年程前に板引き網漁で発見した。発見位置は新川～佐渡鴻ノ瀬鼻灯台ラインの北側で、水深は100m程度、正確な場所は不明であるが、おそらく資料２と近い場所ではないかとのことである。付近からはかつて大形の碇が引き揚げられている。

資料２（須恵器長頸壺）　洋人氏が５年程前に小型底引き網漁を行っている際に発見した。発見位置は新潟港灯台から14マイル（25.93km）沖、佐渡航路の中間地点で、水深約90m。北緯38度02.1分、東経138度45.3分（日本測地系）である。付近では長さ12m、厚さ40cm、幅40cm程で和釘の残る１枚板（洋人氏は「和船の部材ではないか。」とのこと。）が網に掛かったことから船の脇で発見された可能性がある。周辺には船が10隻以上沈んでいると言われており、潮の流れが速い場所とのことである。

遺　　物（図１・78頁写真）　１は須恵器大甕、口径23.7cm、器高46.6cm、体部最大径37.8cmを測り、体部上半から口縁部の３分の１程を欠損する。口縁部の破面は磨耗していることから、海中にあった時から破損していたと考えられる。成形・調整は、口縁部ロクロナデ、体部外面は格子目タタキ、内面は上半が放射状当具痕、肥厚部の下半は平行当具痕がみられる。口縁部下端は肥厚せず、口縁部・体部一体成形である。内外面に貝殻が付着し、体部上半に新しい割れが認められる。

２は須恵器長頸壺、高台径10.0cm、現存高21.7cm、体部最大径18.4cmを測る。口縁部を欠損するほかは完形。口縁部破面は磨耗しており、海中にあった時から破損していたことがわかる。調整は、体部上半はロクロナデ、下半はロクロナデ後、ヘラケズリ、格子目タタキが行われている。外面には貝殻が多く付着する。

２点とも、佐渡小泊産須恵器で、９世紀後半から10世紀初頭頃のものと考えられる。（渡邊朋和）

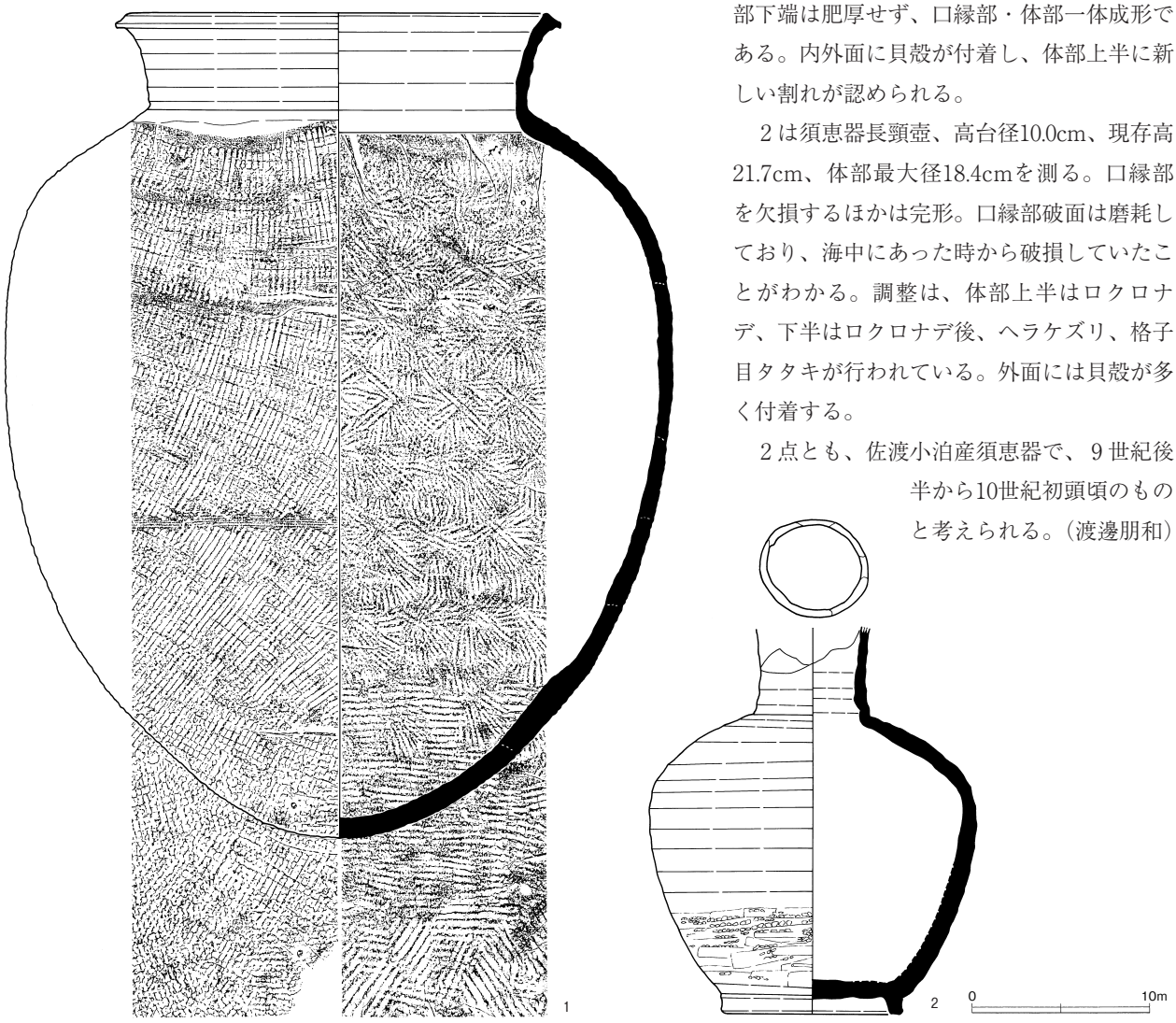

図１　遺物実測図（１/４）